

営農情報

第23号 平成26年5月1日

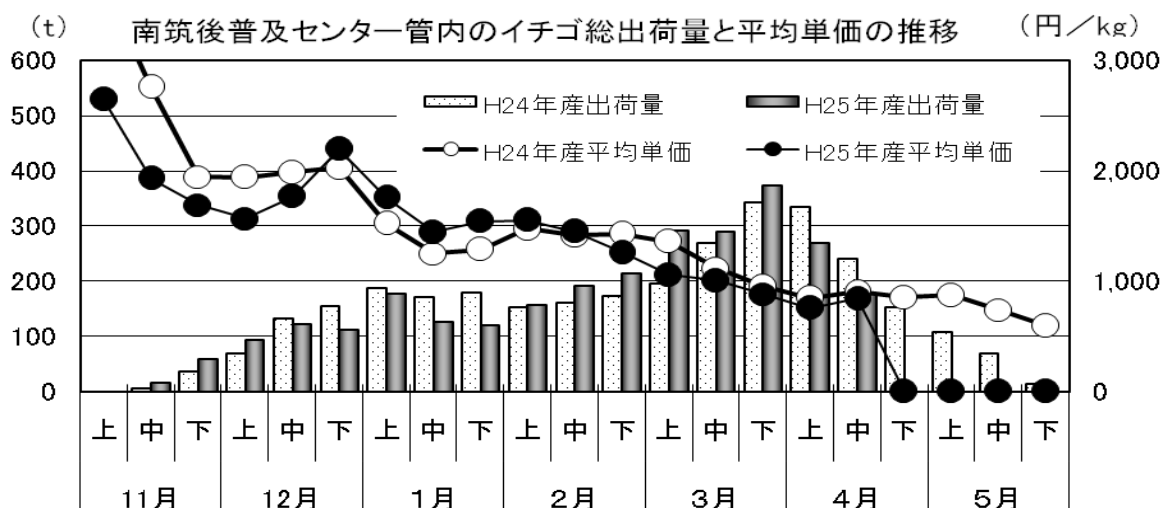


「あまおう」5月の管理

南筑後普及指導センター
福岡大城農業協同組合

3月に入って急激に気温が高くなったことから一気に果実の着色が進み、3月下旬には3番果房のピークを迎え、収穫量が増加しました。4番果房については、ほ場や株によりバラツキがありますが、早いところは収穫中となっています。

親株は順調に立ち上がっており、ランナーは4～5本発生しています。今年は親株の展葉開始以降、定期的な降雨が続いており、炭そ病の感染が懸念されます。特に、ランナー発生が盛んな5月は定期的な「炭そ病」防除が大切です。また、現在多くの親株床で、アブラムシ類の発生が見られますので、併せて適期病害虫防除に努めましょう。



本ほ管理

<軟果・傷み果対策>

- 収穫作業は高温時を避け、着色基準を遵守して行う。収穫日の間隔は短くする。
- サイド・谷・妻面を開放し、換気を充分に行う。
- 収穫した果実は、収穫箱内での積み重ねを避け、直ちに低温の場所に移す。
- 収穫前日のかん水は避け、収穫後の少量多回数かん水に努める。

(土壌水分の目安は、pFメーターで1.7～1.8、軟果が多い場合は2.0程度)

親株の管理

<ランナー発生促進>

- 親株の乾燥や肥料切れ及び不必要な下葉や花蕾の除去の遅れは、生育の遅れやランナー発生の遅れに繋がる。
- プランター育苗は乾燥しやすいので、株元にかん水チューブを設置し、確実に株元にかかるようにこまめにかん水する。また、5月上旬までにIB化成を5～10粒/株施用する。(裏面につづく)

<病害虫対策>

- 炭そ病は予防防除の徹底が重要であり、1枚展葉する毎に**定期的な予防防除**を行う。
- 炭そ病は降雨などで感染拡大するため、降雨前後の防除を徹底する。
(特に多湿になると伝染しやすいので、降雨前の予防散布は重要)
- 雨よけ栽培を行う場合は、風通しを良くして多湿にしないよう注意する。
- 最近、親株床でアブラムシの発生が多く、クロケシツブチョッキリも散見される。また、今後は、カキノヒメヨコバイやうどんこ病の発生も懸念されるため、適期防除を徹底する。

育苗準備

<育苗床の環境>

- 育苗床は、風通しが良く、浸冠水のない排水良好な場所を選定し、排水対策を行う。
- 苗の徒長防止、「炭そ病」予防のため、ポット間隔を広く取れるように育苗床は十分な広さを確保する(ポットの中心間隔を18cm程度確保する)。
- うねは、中央部をやや高くし(かまぼこ状)、水がうね上に溜まらないようにする。
- 床面には、古ビニルを敷き、さらにポットシートやマリックスシート等を上に敷く。

<育苗培土>

- 培養土は、排水性が良く、土がしまりにくいものを選ぶ。
- 培養土量の目安は、8,000鉢当たり3.5寸ポットで**4m³**、3寸ポットで**2.5m³**とする。
- 「炭そ病」が発病した場合に廃棄出来るように、苗本数は3割程多めに準備する。

<鉢上げについて>

【さしポット】

- マルチフィルム上に稲ワラ被覆を行った後、かん水施設を設置し、採苗1週間前からかん水して子苗の発根を促進する。
- 乾燥状態では親株の生育やランナーの発生が抑制されるため、乾きすぎに注意する。



【すけポット】

- 根がこぶ状になった苗を鉢に受け、海苔みず等で止める。
- 大き過ぎる太郎苗は鉢上げせず、全葉を除去する。
- ランナーが、極端に細い子苗は使用しない。
- 鉢土が乾燥すると根の伸張が悪くなるため、乾燥させないようにかん水を行う。
- 鉢受け作業前後の炭そ病防除を徹底する。
- 鉢受けは、5月末までに終了する目標で行う。
- 鉢受けが終わったら、苗の生育促進のためランナーの先端をピンチし、苗の徒長防止と病害虫予防のため、親株の全葉摘除を行う。
- 軟弱徒長防止や「炭そ病」予防のため、鉢受け期間中の子苗への追肥は控える。



農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう!